

20014

治療成績から導く下肢PPI 患者被曝ハイリスク症例の傾向分析

【目的】 下肢BK領域に対するPPI 患者被曝ハイリスク症例の傾向を明らかにする。【対象】 2011年9月から2012年12月に施行した下肢PPI 連続516例中、膝下領域（BK）のみを治療した104例（男性84名、女性20名、年齢71.0才、BMI22.9）【方法】 BKを構成する前脛骨動脈(ATA)、腓骨動脈(PA)、後脛骨動脈(PTA)、足首下(BA)の閉塞の組み合わせと治療後の開存率、石灰化やcollateral等の病変性状と治療におけるAK値の関係性を求めた。【結果】 平均AK値はBK全例:135.4mGy。閉塞タイプはATAのみ開存タイプが最も高く209.2mGy。BA閉塞/開存の比較は149.9/100.6mGy。治療後のBA開通/非開通は115.3/235.5mGy。石灰化の有/無は156.3/115.2mGy。trans collateral approachの有/無は165.6/128.8mGyとBA領域の病変性状が患者被曝に大きく影響する事が示唆された。【考察】 ATAのみ開存タイプがBK3枝閉塞タイプに比し高AK値を示した。これは1枝のみ開存例に用いたcollateralを介したbidirectional approach等の複雑な手技が影響しており、治療後BA非開存例は複雑病変のため高AK値となったと考える。【結語】 BKへのPPI 患者被曝ハイリスク症例の傾向が明らかとなった。今回の検討を活かし末梢血管チームの一員としてより質の高い事前準備ができるよう努力したい。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号